

結論

仮想組織にまつわる社会的重要性は、(第一章で述べたごとく)妥当と思われる題材による議論を結びつけて、それを推論としてまとめたものと解釈されねばならない。我々は、未来の事象を予測する水晶玉を所持しているわけではない。ただ仮想封建制が仮想組織の社会や技術の改革の流れと一致すると主張するのみであって、それが明らかな経済利点を持つマネジメントパラダイムであるから広くビジネスで採用されることに間違い無いと考えるのである。さらに、仮想封建制は過去何十年にわたり我々が見てきたプロセス、国家の没落、と合致する。

この本で繰り返し述べたごとく、仮想組織は要求事項と充足事項の論理的な分離に基づく。メタマネジメントはコンピュータをブローカーあるいは仲介人として配備して、論理的に切り離されたこれらの事項をスイッチング(切り替え)により結びつける。この分離はバイヤーと売り手、マネージャーと従業員、ビジネスとコミュニティなどの間に社会的距離を生み出し、新たに調整と管理の問題を惹き起こす。この種の社会的距離が仮想荘園の特徴の大部分を形作る。一例として、核家族崩壊の原因は仮想組織の連鎖と推測され、知識の再生という家族の持つべき機能が弱まれば弱まるほど家族の結びつきも弱まる。人に代わり機械ベースの製品やサービスが用いられる経済では家族の機能が失われる。その根底には仮想組織でのスイッチングには信頼性の高いインタフェースを要し、人より機械の方が編成しやすいという理由がある。

技術の進歩と呼応した社会の変貌をいろいろと省みて、責任逃れを持ち出して嘆いても意味がない。かつて人類の生きた自然の状態が、ホップズというよりルソーの展望に近かったとしても、その時代に戻ることはできない。望ましい未来の形成という挑戦に立ち向かうべきで、その方がいっそう実り多い。かつて市場経済は、その短所も含め民主組織発展の条件であった。仮想組織は市場経済に強く根付いており、この新しい組織化様式は、市場経済をもって達成される社会的・政治的進歩を拡大し拡張できる。

多分、社会の調和を阻む最大の障害は、「彼ら」と「我々」という不公平な区別をする人間の性分である。人類社会の始まり以来、グループのメンバーでないみなされた部外者は、メンバーにより不信と嫌疑に満ちた扱いを受けてきた。このような行動はさらに古く、動物社会に同じ起源を持つ。起源が何であれ、これは賞賛すべきではなく克服せねばならない。前述のごとく、世界中のいたるところで無意味な腹立たしい区別が殺戮論争に炎をたきつけている。北アイルランド、中東、旧ソ連、および、かつてのユーゴスラビアは最も目立った近年の発火点に過ぎない。すべての地域は敵対派閥をもっており、その永続的な敵意は卵の大小のどちらの端を割るかといったたいして重要でないことに基づいている。ちょうどスィフトのガリバー旅行記にある「小さいエンディアン(endians)」と「大きいエンディアン」の間のいがみ合いのように。

ヨーロッパ社会についてスィフトが18世紀に痛烈な風刺を書いて以来、一人当たりの論争の数が減ったにもかかわらず、蜜行の数やそのような論争の帰結の数が呼応して減ったわけではない。違いが些細であればあるほど憎悪は扱いにくくなるようである。些細な違いを正当と認めるためには、きっと強さが必要なのであろう。いずれにしても、近代破壊兵器を自由に使えることから、少数の戦闘員でも大破壊による壊滅ができる。したがって、全人類のためには人種、民族、宗教、信条に根付く危険な論争を取り除くことが大いに望ましい。

マネジメント実施に交換の考えを導入する仮想組織のスイッチングは、民主的多元主義(人種・宗教などを異にする集団の共存主義)を促進する。交換は市場における単純な行為であるが関係者たちに貴重なレッスンを与える。異なった外観、服、言語、習慣、等々の者達それぞれが、必要なあるいは欲する対象を他方から得るといった共通の目的で合意に達することができる。交換取引の本質は当事者めいめいが相手に何をオファーするかであり、他のすべては従属に過ぎず無関係で、一旦合意に達すればそれぞれ離れていく。このレッスンは長い間に渡り哲学的な平等の概念を強化し国の憲法の中に息づくこととなった。

このレッスンのみならず、スイッチングは特定の条件の下、複雑な社会組織であっても互いに代用できることを意味し、これを実践することで人間の相違に結びついた偏見を克服するよう導く。

さしあたり介在となるコンピュータが多くの問題を生み出す。人間のよく知る調停者として働く技術に依存することで孤立感の高まる近代生活となろう。それでも、万人に適用され、各々を一層人間的にさせるような素晴らしい道義心の革命という種を含むのである。第四章で論じた金の抽象概念は交換を容易にする価値の尺度を与え

る。新しい形式の組織創造のために、コンピュータをブローカーとして用い交換を推進できる。新しい形式が身近になるにつれ、それが受け入れられ、結局そこにはコンピュータブローカーが不可欠な要素として組み込まれ、分かれていた現実を再び集めて一つにする。この議論の発展には近代社会の金の役割を見直さねばならない。

交換や交換価値の尺度や貯蔵の媒体として金は経済生活の潤滑油である。しかし金は経済に関連しない役割も持つ。

価値の尺度としての金の機能は商品やサービス交換の粹に留まらず、特に米国では万物の価値の尺度となっている。これは素晴らしい空のヤード尺であり、成功、地位、知識、健康、幸福、愛、生命それ自身、ほぼ全てを測ることができる。名誉でさえ「あなたは百万ドルの対価でそれをするでしょうか？」で終わる一連の質問で測ることができ、この際「それ」は不名誉な行動を指す。この冷笑的な冗談は、名誉は単に価格次第であることを打ちたてようとするもので、金に精通する誰にでも理解できるし、ドルを他の通貨単位に換えるのみで冗談は普遍化する。

金による査定を用いてビジネス理論と分析をさまざまな人間問題に適用できる。利益と損失に立脚するビジネスモデルは公的・私的資源配分の算定に定期的に使われる。例えば政策質問は通常金基準で定式化される。航空管制システム、危険廃棄物清掃、公衆衛生、洪水防止などへの投資で人命を救うのにどれ程費用がかかるかのように。

市場経済の旗頭は20世紀前半にヨーロッパから新世界に移され、この移植は外見上皮肉にも金中心の文化のさなかで狂信的な状態である。米国人は、誓約の宣誓に見られよう宗教的であり、米国での調査では人々のたった6パーセント(ヨーロッパで10パーセントまた世界中で12パーセント)が無神論者あるいは非宗教会員と主張する(World Almanac、2000年)。米国では神でなく金が最終の調停者である。ヨハネによる福音書の冒頭言の若干修正版が米国の基本信念の適切な性格付けをしよう。「初めにドルありき、ドルは神と共であり、ドルは神であった」。

米国における神と金の融合は偶然でなく、深く根ざした必要感を反映している。金は自由を買う、というのも個人的な(商品や仕事などの)選択という具体的な意味や、密接に結び付いたコミュニティの制約からの解放という抽象的な意味合いで。しかし自由に歯止めがないのも困る。人々は安定した家族や近所や他のグループでの落ち着きを欠き、慰めや支持を何らかのコミュニティで見いだすことをこれまで以上に欲している。米国全土に点在する無数の教会と分離派教会が代理家族や近所やグループの役をするが、サイバースペースの仮想コミュニティが同じ機能を果たすことができるか否かはまだ不明である。

Nisbet(1953)は、ポストモダン(20世紀後半)の世界における新しい理想の追及を、中世から近世への社会移行で失われたコミュニティのようなものの探求であると特徴づけた。中世では自由なくしてコミュニティが存在した。近世ではこの関係を楽しんでコミュニティなしで自由を作り出し、これは過激派による個人主義と19世紀の知識人によって認知された。実際このような変質は何世紀にもわたったが、産業革命時の大規模な生産組織の出現がその速度を速めた。

荒削りな個人主義の遺産などには満足せず、自由の伴うコミュニティを指向するのはどうであろうか。この考えを具体化したのはAmitai Etzioniによって設立されたコミュニタリアン(個人に対する共同体の存在論的優位を説く政治思想)の動きで、コミュニタリアニズムは権利と義務の均衡を保ち、権威主義を織り込むことなく共同体の活性化を目指す。つまり「でしゃばりは我々の個人的な問題に干渉するな」(Etzioni、1993)ということである。自由なコミュニティの探求が情報技術の展開に影響を与えるのは確実であるが、特にインターネットに見られるような技術の潜在性が逆にその探求の原動力となり、自由なコミュニティの設立に向けてさまざまな実験を促す。しかし新しい技術はさらに重要で永続的と見られる他の事柄に縛られる。経済における個人主義が強大な組織を生み出したが、その成功は断片的な活動の合理的管理に基づく。テーラリズム(科学的経営管理)の近代変形版はまだ工場とオフィスで盛んで、例えば仕事の性能と制御を再統合するコンピューター通信の潜在能力の活用は仮想企業ではこの次かもしれない。

自由を持つコミュニティの探求は、世界的な政治経済変革のさなかに起こるマイクロレベルの現象であって、スイッチングとメタマネージメントがその探求に役立つであろう。しかし、その使用は無作為に選択された不特定な個

人によって決められるのではなく、巨大な資源や権力のみならず世界的な活動能力を持つ組織によって主要な選択がなされる。

第四章で述べたごとく、金は物の質を抽象化したものである。数が量の純然たる尺度であるごとく、金は実益の純然たる尺度で、日常での諸事決定の際の尺度として役立つ。教育に備えことは一例で、教育が望まれるのはより賢明に優れさせるからでなく、市場でうまく競争するための技能をそれが供するからである。従って教育の選択が金で算定される。上流、中流、下流の人々は皆同じような理由で教育に価値を持つが、自身と子供達への教育の獲得にそれぞれずいぶん異なった戦略をとる。金持ちは子供達に金で買える最良の教育を保証するために個人的な犠牲を払わず、貧しい連中には個人的な犠牲などの選択はなく質の高い教育には単に手が届かない。中産階級は貧困への過敏な恐れと富への激しいあこがれから最も入念な教育の戦略を持つ。このような本質的、物質的な相違にもかかわらず、これらすべての社会階級は似たような観点から教育を準備する、すなわち、将来の収益力への投資として。

教育は、金を選択に際して均質な見積もり計画となる例を示している。人の究極の目標がより高い社会階級であろうと現状維持であろうと、目標達成の方法は、可能性(すなわち収益力)あるいは実際の富(すなわち所有財産)を蓄積することであり、どちらの場合も金は尺度である。成功した実業家、映画スター、スポーツスター等、話題の文化ヒーローのメディア描写は、彼らが稼ぐ額や彼らの所有財産の価値に広く関心を集めるし、ノーベル賞の発表は授与される業績とほぼ等しくそのドル価値に関心が注がれる。

価値の代用としての金の用途の解釈を拡張すれば様々なニーズと願望の均等化をもたらす。そのような拡張は多分、物質主義的で無情ととられるかもしれないが、ニーチェの「価値の再評価」の基礎を与える。人の行動と状態を金で評価することと銀行預金残高で個人の価値を算定することを取り違えてはならない。金は価値のヤード尺であり、コミュニティを査定する代理を務めるだけである。金が拘束するのではなくむしろ解き放つことが分かるであろう。情報技術のもたらした社会変革の大きな皮肉な結果のひとつは、人間性をはく奪された、つまり人間は数に変えられた、と人々が解釈していることであるが、実際には人間性の縮小とみなされていることはいっそう深遠な人間らしさ復活の基礎となりえ、真の人間の地位の拡張を万人にもたらす。

仮想組織は、金をスイッチング達成の判断基準として使い、これが原則的には、性、人種、民族性、あるいは宗教に基づき偏見を助長する排他主義的価値システムの呪縛から人々を解き放つように働きかける。仮想組織は生活にかかわる経済領域から広まる一連の社会的試みであり、なかでも成功している試みが人間社会の一員であるための条件を広げているのである。

公的権威の民営化と契約関係への従属化は、仮想封建制に普遍的な人権思想の普及を働きかける。コンピュータ通信のもたらす社会的ネットワークは、拡張する市場で異なる関係者の間をとりもつ柔軟なインタフェース・ツールとして契約の概念を変える。拡張する市場力と正式な協定が一体となって個人の権利を守り、このようなシステムは権威の集中を不要とし、共有されるべき管理プロトコルのみを求める。多様な社会での個人としての保全は、合理的な交換の原則に基づくスイッチングシステムを持つ仮想組織により保証されよう。

仮想組織の最適化スイッチングの実用的な活用は、関係者全てに利益を供する能力を持ち、封建制の契約という重苦しい傾向の埋め合わせとなる。全ての関係者は、インタフェースが許容する契約の柔軟性を最大化することに興味を注ぐようになろう。

数多くの社会運動と社会システムが普遍性を支持してきたが、ほとんど何も達成していないのが実情である。偉大なる宗教は普遍的な兄弟の間柄を唱道してきたが、いまだに部族間闘争がその認識を阻み続けている。民族国家は全てに基本的権利を保証する模範的憲法を採用したが、この「全て」は市民であって、全ての人類に言及するわけではない。実際、真の平等化にはさらに障害があり、それは国家(あるいはその構成要素部分)を支える柱、すなわち領土、言語、習慣、およびそこに創られる文化と伝統、から生じる。このような障害の構造的な特徴が、大規模な民族国家の概念の潜在的な効力、すなわち同一な政治的統合下で全ての世界を抱合すること、に疑いを投げかける。宗教であっても国家であっても世界を「我々」と「彼ら」という部族に割ってしまうことを根絶させることができなかった。部族の衝動は持続する。

同族心を超越する実用的な社会機構無くして、世界は強情な対立に悩ませられ続ける。北アイルランド、

南アフリカ、ユーゴスラビア、中東、カシミール等の問題はすべて醜い状態で持続する。特定のコミュニティのメンバーだけではなく、すべての人々の取引で平等の観念を強化せねば効果的な社会機構とはいえない。

個人的な忠誠を合理的な私欲の原則に置き換え、厳格な関係を柔軟な社会インタフェースに置き換える仮想組織は、部族による分裂を取り払う。ここでは具体的な充足物を、抽象的な要求条件に「最小充足」の基準 (satisficing criteria) で割り当てることによって決定がなされる。要求条件を分析する活動と具体的な充足物を識別する活動は独立に行なわれ、個人的忠誠という主観的判断から決定プロセスが汚染される機会が無くなり、部族間の敵対心の余地を生み出さない。仮想組織のもたらす経済域での競合の利点の本質的な平等主義を維持するとみなされる。普遍的な平等は、仮想組織における充足物の代替置換が可能という曲げられない結果として発生し、この種の組織化の経験が広がり、その実用的な利点が正当に評価されるようになるにつれ、部族意識による差別特徴は次第に薄れよう。

人間コミュニティの枠組み拡張は、悲しくも抵抗や反動や社会激変なしでは起こらなかった。民族意識の終了は、扱いが極めて難しいであろう自由の段階を示唆する。実際、中世封建制の解体に伴った部分的な束縛解放よりはるかに難しい問題となる可能性が高い。仮想組織に適合する新しい形態のコミュニティを発明し、自由化による混乱の可能性を抑制せねばならない。もし古代ローマの失敗が繰り返されるなら、人間困窮の新しい章が歴史に加えられることは必定である。

生活のすべてが仮想組織により直接・間接に造り直されてゆく。仕事は、個人のアイデンティティー確保に重要な消費の場として徐々に全盛をなし、我々は消費が主体となり、消費の経験自体もいっそう仮想化する。コンピュータ・ベースの製品やサービスが大きな経済役割を持つにつれ、核家族は崩壊する。インターネットの使用が広がるにつれて、新しい形態のコミュニティとそれに関連した社会管理メカニズムが登場する。倫理的な行動意識は、個々人の社会的かつ心理的な距離の増加により弱体化し、この距離はいたるところに介在するコンピュータがもとになり引き伸ばされる。

社会行動は自然界と同じく反動を引き起こす。仮想企業でのスイッチングの使用は、労働組織を衰弱させ労働者と雇用者の間の力の均衡を崩すため、消費者グループが潜在的な力を得ようになり、労働闘争の mantle は消費者に手渡される。19世紀には、組合が資本所有者と管理者に対して唯一の相殺力を持ち、労働組合が従業員を動員して環境改善に戦い成功した。生まれつつある仮想領地の大君主に政府の捨て去った社会責任を強いるためには、多分消費者による類似した動きが必要となる。ボイコットは世界市場に及ぶ企業政策に影響を与える強力な道具であり、単に製品をボイコットするという脅迫は、しばしば企業の政策を変えるのに十分である。仮想封建制度においては消費者による仮想共同体が力の均衡是正の鍵を握る。

仮想組織に反映される先進の情報技術は、これまでの道筋とちょうど正反対に未来の開発進路をとるであろう。国家は君主制と封建制の間の長い権力闘争の末に出現した。仮想封建制は、準中世の政治経済に逆戻りし、そのような闘争プロセスを造ることで生まれるであろうし、その結果は、私的(ビジネス)当局と公共(国家)当局の領域によらないシステムでの融合であり、すべての人間の威厳と政治的な平等を保証する。あるいはそれほど魅力的でない何かである。